

地域の団結は市町村合併の渦の中から 立ち上がれ岩村のNPO

藤澤 徹

昨年十月に広域合併により岐阜県恵那市となった旧恵那郡岩村町。岐阜県の南東部に位置する同町は人口五千人強で、日本三大山城の岩村城址や重要伝統的建造物群保存地区選定の町並み、日本一と言われる農村景観を擁する町として、にわかな話題をよんでいる。穏やかなメインストリートは、観光地として呼び名の高いような町のそれとは違い、取りがない人々の住む生活や日常がある。これまでに、まちづくりのアドバイザーとして岩村に通い、住民との話し合いや、実験をもとに、合併後の岩村の動きと方向性について報告する。

岩村のまちづくりと町民気質

岩村町には、長年続くまちづくり団体「いわむら町まちづくり実行委員会」がある。まちづくりの拠点となっている当団体は、岩村町の活性化に力を注いできた。いわむらファミリー・ウォークやいむら城址新能などに代表される各種のイベントを主催し、観光の町岩村を盛り上げてきた。また、岩村の町並みは古く、目抜き通りの本町の主屋の約四分の一は江戸時代の建物である。イベントを含めて、これらを保存すべくボランティア組織が十年以上も存在しているその力、故郷を愛する心は、各地の同様の団体から注目されることとなっている。広域合併後に向けて、当団体はこれまでと同様の活動ができるための計画と戦略をしてきた。

その一方で、各イベントでのお金の捻出はこれまで、岩村町行政に頼るものでもあった。町並みの活動にしても、旧屋敷は町が運営・管理しているものである。

岩村の古い町並み



ガイドボランティアの組織も行政に依存しているカラーが強かった。それゆえに外部にはまち並み保存活動が上手く機能しているように映っていたのかもしれない。

しかし、広域合併を終えた今、これまでのように岩村町内でのイベント等に予算が付くかどうかは先行きが不透明である。実際に、各方面で好評を得ていた岩村町単独の観光パンフレットについては増刷が中止になり、観光商工課が運営していた、岩村の観光のホームページなど

も新市のそれに組み込まれ、盛り上がりを見せていたIT特区として目玉事業であった町内完全無線LAN事業も合併前にインフラ整備を終えて事業の終了を宣言した。当初計画されていたさまざまなコンテンツの実践は新市に委ねられることになった。

さまざまなまちづくり事業の縮小のなか町民の団結・事業展開等への準備不足は否めなかった。これからの日常のなかで、不自由さを感じながら困難を乗り越えていかなければならない現実がある。岩村に限らず、地域レベルでのまちづくりでも一方で資金面では行政主導によるケースが依然として多い。これまで財政面と行動が機能して、町民と行政との足並みがそろった岩村町として、外部へのパフォーマンスを通して、まちづくりが充実していたかを見えた。しかし実践を問われる今、商工会を中心に「岩村」としての展開に頭を悩ましている。

立ち上がった有志たち

合併後の岩村でもっとも危機感を募らせていたのは、観光面によるものだった。岩村は重伝建の町並みを擁しているものの観光都市としては全国区ではない。一方で、お土産や物産等は充実しており、それらは、これまで岩村重伝建のいわばアプリケーションとしてPRしてきている。岩村の名前が合併をともしして埋没していくようならば死活問題である。商工会は、諸企業でなりたっているが、物産色が強い物販を展開している人間はこの問題には関心が高い。もともと狭い地域でありながら、地域内での事業に関しては、みな保守的な考えでいた。しかし、夏以降商工会での話しあいは、毎回、長時間に及ぶようになり、眼前に迫った問題に対しての展開を議論してきている。

そんな中、商工会の有志たちで、岩村ブランドを広めていくための新しい組織を立ち上げるという案が浮上した。もちろんそれは町に対しての慈善ではなく、自らが今後食べていくための手段である。内容は、これまで以上に岩村を全国に発信していくために、イベントの充実、町並み保存、さらに物販等の代理業を行う、地域のためのエージェンシーである。前述したが、岩村の町並み・物産は非常に充実していて、それらは個々で特色を持っている。そこに地域色をプラスさせることでさらなる輝きを放つ。話し合いを通して、「NPOいわむら（仮称）」を立ち上げる方向になり、岩村で初めての脱行政の組織が動き出した。

具体化される戦略がNPO設立への道

案が出されてから、具体的展開へのスピードは加速していく。名古屋・東京方面の商店街やデパート等への岩村物産ブースの常設の依頼や、設立にむけての岩村町内での会員への呼びかけなど、町内で二百年続く家具屋の社長を中心に展開された。これまで行政依存色が強かった町民に対して自らが金を出し企画立案していくことに關しては当然難色を示すほうが多い。それらには具体的な動きを見せていくことが説得力を増す。

東京でのイベントに青年部が参加



岩村町の名前が各地域に並ぶ



これまでに、東京の集客力のあるイベントへの参画を果たし、その後、とある商店街の一角に岩村のブースを設置することの許可を得て取引を開始している。少しずつではあるが、半年の間に着実に進んできている。専門家を呼んでの、メンバー内でのNPOに関する勉強会の開催など、これまでになかった意欲を見せる。広域合併という町民には刺激の強いスパイスが、新しいまちづくりのスタイルを生み出したのだ。

来春には、新しい岩村の顔が誕生する。各地域と民間レベルでの連携とともに、岩村の活力源として機能できるかどうか、運営していくことの難しさやさまざまな壁が待ち受けている。自分たちの生活と町を守りたいという思いが、どこまでテクニカルな部分をカバーできるかは未知数である。今後のNPO設立までの道のりと、活動について町民レベルでの考えを基に、動向を見ていく。

岩村物産ブースの展開

